

第四章 気 候

天気の状態を表す用語のうち気候という語は、長年にわたる気象の平均の状態を指している。これは、短期間ではなく、十分に長い期間をとることで、その地域特有の気象の平均の状態を理解することができるので、他地域との比較をするときに便利である。

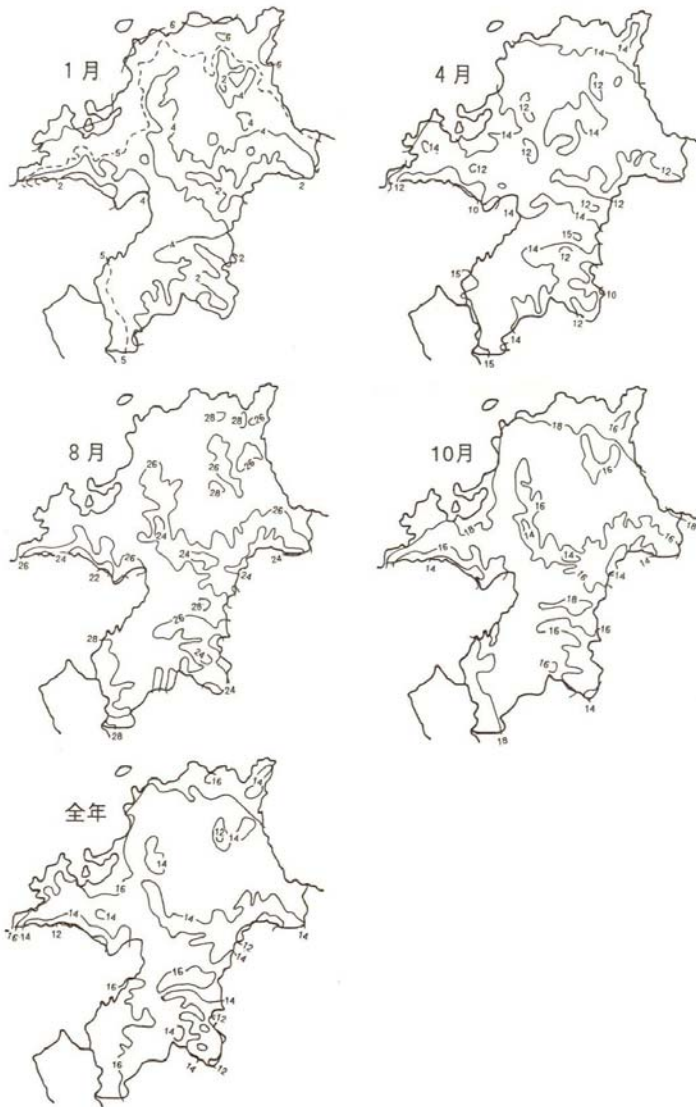
気候の地域差を生じる原因（気候因子）は、緯度・経度で示される地球上の位置、海陸分布、海拔高度、地形などに影響される。また、気候の特徴の説明には、気温・降水量・風向・風速・湿度・日照時間などの気候要素が使われる。なかでも気温と降水量は特に重要な気候要素である。

第一節 気候要素

一 気 温

(1) 福岡県の気温分布

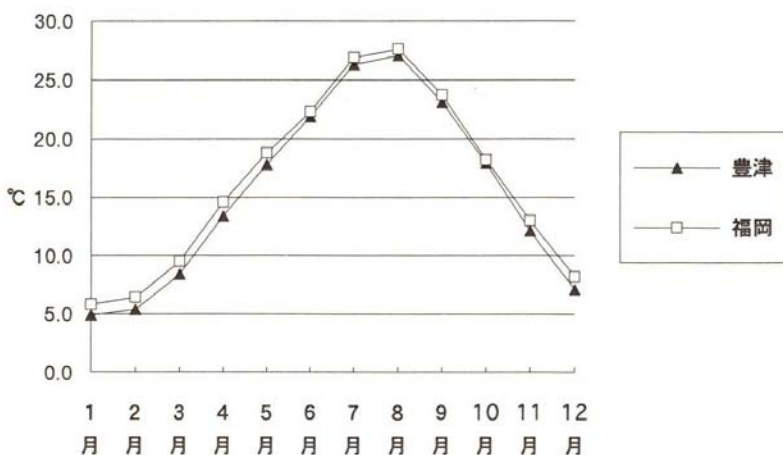
メッシュ気候値による福岡県の年平均気温と、一月（冬）、四月（春）、八月（夏）、十月（秋）の月平均



第9図 福岡県の月平均気温の分布
(福岡管区気象台 1990)

気温の分布を第9図に示す(福岡管区気象台、一九九〇)。
県内の気温分布は、平野では各地とも大きな差はないが、県の北部沿岸や有明海沿岸、筑後の平野部は相対的に気温の高い地域となっている。福岡市、北九州市、有明海の各沿岸と筑後の平野では、年平均気温は

第4章 気 候

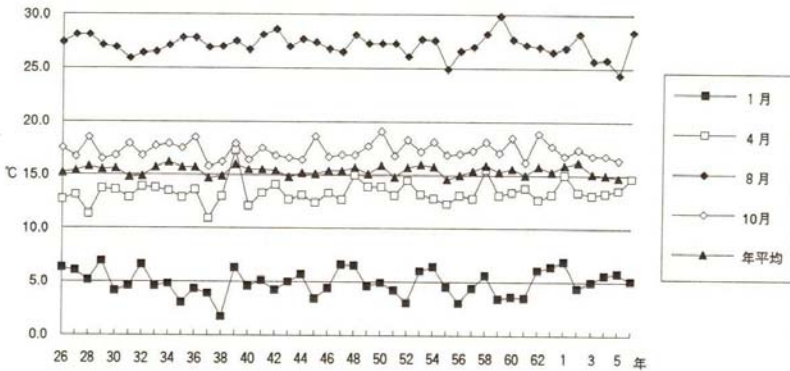


第10図 豊津と福岡の気温分布比較

一六℃、一月は五〜六℃、四月一四〜一五℃、八月二七〜二八℃、十月は一八℃となる。筑豊地方では北部沿岸、有明海沿岸や筑後の平野部に比べると、一月(四〜五℃)と十月(二七℃)は一℃低い、四月(二四℃)と八月(二七〜二八℃)は同じ気温になる。これは、筑豊地方の内陸的気候を示すものである。県東部の周防灘沿岸は、年平均気温一五℃、一月五〜六℃、四月一三℃、八月二七℃、十月一七〜一八℃と他の沿岸部に比べて約一℃低い。山地の気温は、海拔高度が高くなると気温は低くなる。年平均気温一四℃、一月四℃、四月一三℃、八月二六℃、十月一六℃の各等温線は、ほぼ海拔高度二〇〇メートルぐらいの等高線に沿っている。

(2) 豊津町の気温分布

豊津町には、定常的な気象観測の資料はないので、ここでは行橋市南部の豊津町との境界付近に位置する福岡県農業総合試験場豊前分場の資料を使う。この資料は、福岡管区気象台が発表する行橋市の数値と少し異なっているが、



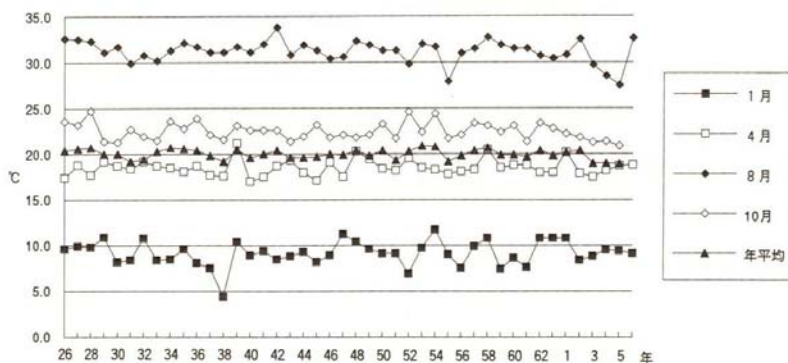
第11図 豊津の昭和26年～平成6年8月の平均気温の推移

昭和二十六年から平成六年八月までの連続的なデータが得られることから、これを豊津町の気象データとして利用する。平成六年版の『理科年表』による福岡の気温の平年値と豊津の昭和二十六年から平成五年までの気温の平均値を比較すると、豊津の方がすべての月で低く、やや内陸の要素が強く表れているといえる(第10図)。

i 平均気温

この地点での年平均気温は、昭和二十六年から平成五年まで、一四・六℃から一六・二℃の範囲内で変化している(第11図)。この期間で最も低い年平均気温は、昭和五十五年の一四・六℃であり、昭和三十七年の一四・七℃がこれに続く。この気温の低さは、主として夏季の低温に起因している。七月の平均気温は二六・四℃であるが、昭和五十五年のそれは二四・三℃、昭和三十七年は二四・九℃であり、八月の平均気温は二七・二℃であるのに、昭和五十五年は二四・九℃、昭和三十七年は二六・九℃である。昭和五十五年の九月は〇・九℃、十月も〇・四℃、それぞれ平均に比べて低い。十一月によりやく平均気温と同じになる。冬

第4章 気 候

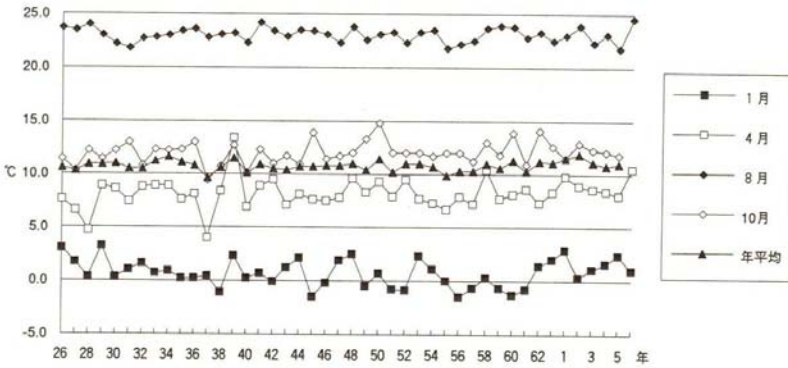


第12図 豊津の昭和26年～平成6年8月の最高気温の推移

季の気温も平均的に低いが、特に昭和五十五年の低い年平均気温は、主として夏季の低温に起因したものと見える。また、平成五年は、特に夏の低温で特徴づけられ、七月の平均気温は二四・三℃、八月のそれは二四・四℃である。このうち八月の気温は昭和二十六年以降で最も低いものである。平成五年の冷夏については後述する。

一方、年平均気温が高いのは昭和三十四年と平成二年の一六・二℃である。このいずれも極端に高い気温の月はみられず、年間を通して平均より高い気温が続いた。

一年のうちで最も高い気温は八月であり、平均気温は二七・二℃である。八月の平均気温が最も高かったのは昭和五十九年の二九・九℃である。これ以外は極端に高い気温はみられない。昭和五十九年は一～三月が平均をかなり下回る気温であったが、夏季に高い気温であったため、年平均気温は平年値とほぼ同じになっている。平成六年の夏は七月の平均気温が二九・〇℃、八月の平均気温が二八・四℃となり、日本の各地で記録的な暑さとなった。この暑い夏についても後述する。



第13図 豊津の昭和26年～平成6年8月の最低気温の推移

ii 最高・最低気温

最高気温の月平均値で最も高かったのは昭和四十二年八月の三・八℃である。このときの極値は八月二十四日の三五・五℃であり、必ずしも極端に高い気温ではない。最高気温の極値は昭和五十八年八月四日の三八・〇℃であり、この年の最高気温の月平均は三二・七℃である(第12図)。昭和五十五年の夏は低い気温で特徴づけられるが、最高気温の月平均値も七月が二八・〇℃、八月が二七・九℃で、昭和二十六年から平成四年までの期間で最も低い値である。これについては福岡管区気象台(二九九〇)の報告があるので、次項に記す。しかし、平成五年の七月は二七・一℃、八月は二七・五℃で、昭和五十五年のそれらより低い気温を記録している。

最低気温の月平均値が最も低いのは、冬季であるのは当然であるが、昭和四十五年と昭和五十六年の一月の月平均値がマイナス一・五℃、昭和四十三年二月がマイナス一・七℃である(第13図)。昭和二十六年から平成四年までの期間の最低気温の極値は、昭和五十二年二月十九日のマイナス八・六℃である。昭和五十二年は

寒冬を記録したが、これについても福岡管区気象台（一九九〇）の報告を次に記す。それに続き昭和五十八年二月十四日のマイナス七・三℃、昭和五十五年一月十九日のマイナス六・六℃、昭和四十二年一月十八日、昭和五十六年一月二十三日、昭和五十九年二月十日のマイナス六・五℃である。最低気温の月平均値の年平均は一〇〜一一℃であるが、一〇℃を下回ったのは昭和三十七年の九・六℃、昭和五十五年の九・九℃の二回だけである。

このように、年平均気温の低さは、夏季の気温の低さが最も大きな原因をなしているが、冬季の気温も同様に低く、その際、最高・最低の平均気温がともに低いことで、全体として平均気温が低くなることが分かる。

(3) 福岡県の昭和五十二年の寒冬と昭和五十五年の冷夏

i 福岡県の昭和五十二年の寒冬

福岡管区気象台（一九九〇）は、昭和五十二年の寒冬について、次のように記している。

「一九七七年（昭和五十二年）は前年の年末から二月下旬初めまで、強い冬型の気圧配置がつづき、九州全域で低温や大雪に見舞われた。特に、二月中旬の記録的な寒波は、各地で大雪や低温による被害が大きかった。福岡では、二月十六日の日最低気温が氷点下五・二℃（二月の日最低気温の低い値の累年第五位）まで下がり、日最高気温も氷点下一・三℃と、一九五一年（昭和二十六年）以降低い値の第一位を記録する異常低温となった。

このため、福岡市、北九州市などで、水道管の破裂や断水が数千世帯に及んだほか、果樹、野菜、茶など

に大きな被害がでた。九州縦貫道はほぼ全面にわたってストップし、スリップ事故や鉄道のダイヤの乱れ、空の便の欠航があいついだ。また、この年には、インフルエンザがまん延するなど、寒波の影響は社会の各分野に波及した。」

ii 福岡県の昭和五十五年の冷夏

また、福岡管区気象台（一九九〇年）によると、昭和五十五年の冷夏については、次のように記している。

「一九八〇年（昭和五十五年）の夏、福岡県は顕著な冷夏に見舞われた。この夏期間の福岡の日平均気温、降水量、日照時間などのうち、特に、七月（八八六・〇ミリ）と八月（八四六・五ミリ）の降水量は、月降水量の多い値の累年第一位を記録する多雨となった。また、八月の月平均気温は二四・五℃で、平年より二・八℃も低く、八月としては月平均気温の低い値の累年第一位となった。八月の月日照時間は七七・八時間で、これは平年のわずか三五サトという日照不足の状態がつづいた。

このため、福岡県では水稲をはじめ、果樹、野菜、花き類、大豆、飼料作物などほとんどの農作物に大きな被害がでた。また、海水浴場やプールの客は少なく、アイスクリーム、ビール、冷房器具など、夏物商品の売れゆきは落ちこみ、土木建築関係の屋外作業は遅れるなど、経済活動や日常生活にも大きな影響をおよぼした。」